

水底の歌

みなそこ

うた

柿本人麿論

下巻

梅原猛



126149



日文 701675185

水底の歌

みなそこ

うた

柿本人麿論

（下巻）

梅原猛





水底の歌

柿本人麿論（下巻）

昭和四十八年十一月二十日 発行
昭和四十九年十二月三十日 五刷

定価一〇〇〇円

著者

梅原 猛

発行者

佐藤 亮一

活版

株式会社 三秀舎

写真版

学術写真製版所

原色版

半七写真印刷工業

製本

新宿加藤製本

発行所

株式会社 新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 二六六五一一
編集部 二六六五一一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

和歌之仙 受悟大夫
 長才集 云 錦花法
 三十一字 詞華高幹
 四百餘家 兼采同傳
 動之遠道 雲翔於骨
 海而量深 預之深遠
 國多於京 廣用其言
 已謂得矣 亦政比底
 年過八十 尚能如此
 車乃 妙在音義
 為一而 終久



1
 柿本人麿像（京都国立博物館所蔵）



2 柿本人麿像（土岐善麿氏旧所藏）

水底の歌
(下巻)
・ 目次

第二章 年齢考（承前）……………二

三つの問題点と宣長の聞いた運命の皮肉　歴史家・信友の読みとった背景
明治以後の解釈に共通するひずみ　古事記神話の呪縛の下で　四つの天
孫降臨神話　神話の変容が物語る権力者の自己意識　「神代紀」に残る神
話再編時の政情の反映　高市皇子に地上の大王を見る信友の説　天孫降
臨を支える天の岩戸神話の思想　天皇概念の成立と偶然のたわむれ　確実
に天皇が出てくる最初是人麿の草壁挽歌である　則天武后と持統皇后におけ
る道教的世界観　壬申の乱の思い出と六皇子の誓いの聖地　神仙境・吉野
宮滝と天の女神・持統の誕生　『懷風藻』の吉野詩群と不比等の二首　不
比等をめぐる官僚漢詩人グループ　人麿の吉野行幸歌と孤独の影　作られ
た聖なる国体——人麿は舍人ではない　真淵の人麿誤読の意志　天皇制イ
デオログとしての人麿像　真淵の人麿Ⅱ陰子説の論理的矛盾　伝承の人
麿像——六十余歳の死の秘密　論理的整合性のわな——真淵説の前提への疑
念へ

第三章 官位考・正史考

人麿像に見る誤謬の体系化 延喜式規定の例外——除名者は「死」と誌す

別名をもって正史に登場する貴族たち 田辺爵氏の人麿Ⅱ猿説にありうるも

う一つの推論 則天武后にはじまる刑罰としての改名 考えうる仮説とし

ての持統女帝による人麿改名 猿は中宮大夫ないし春宮大夫であった 『古

今集』真名序の「柿本大夫」の意味は何か 大夫は五位以上の通称ではなく

職の長官を指す 伝承にひそむ真実——人麿と猿の官位は一致する 猿丸

大夫の謎——藤原盛房の考証 歌なき歌聖——藤原公任の猿丸イメージ

奇妙な猿丸の痕跡——猿丸集・墓・狂言『舟船』 猿丸大夫は伝承に埋もれ

た人麿に他ならない 猿丸の旧跡・曾東は人麿の最初の流刑地であった

近江と人麿——『万葉集』卷三は何を語るか 流人の惜別をうたう垂麿の

歌 堰かれた川波に自己の運命を見る詩人の嘆き 反抗と好色——『柿本

集』詞書と采女挽歌に見る人麿像 人麿流罪の伝承を誌す二つの文獻 人

が神になるとき——七十を数える柿本神社 『柿本大明神縁起』——水難の

守神としての人麿信仰 人麿影供次第——歌道の支配神としての人麿信仰

『万葉集』以降の採集歌に見られる人麿像 人麿・篁のダブル・イメージと

明石歌の裏の伝承 もう一つの裏の伝承——中世歌学の思弁 呪歌として

の明石歌——二つの非業の死の残像

第四章 『古今集』序文考……………

三二

『古今集』仮名序にひそむ『万葉集』撰集の鍵 教長・清輔の聖武帝時代撰集説 仙覚の聖武—孝謙帝説と金子元臣の序文改竄 顯昭の平城帝説と俊

成・定家の懷疑 契沖・真淵の明快な論理的裁断 窪田空穂の示唆にみち

た着眼 平城帝による柿本人麿の復権 美的世界の理想の表白「身をあは

せたり」 古今を万葉に結ぶ貫之の文学観 鎮魂のための死後贈位——伊

予親王と菅原道真 サル年に回歸する黒いユーモア 長屋王時代の柿本神

社創建と子孫の復権 怨霊の成立と鎮魂のパターン 『万葉集』撰集につ

いて放置されてきた三つの鍵 壮大なる歴史的叙事詩としての「原万葉集」

『人丸秘密抄』のひそかに語る第一次撰集の情況 『古今集』序文の三つの難

点の正しい読み方 大同元年（延暦二十五年）に何が起こったか 五百枝

王と死せる大伴家持の復権 花ではなく根をえらぶ暗い軌跡 死の床につ

いた偉大なる帝王・桓武の恐怖 三月十八日に始まる怨霊鎮めの七日間

今につづく崇道天皇の鎮魂者としての五百枝王の血統 『万葉集』撰集の三

段階——天平勝宝・天平宝字・大同 平城帝と五百枝王による鎮魂の勅撰和

歌集の成立 体系構築のための粗描——補助線の適否の検討

あとがき	三三
------	----

年表	三四
----	----

図版目録	三五
------	----

「水底の歌」〈上巻・下巻〉 総目次

〈上巻〉 第一部 柿本人麿の死——斎藤茂吉説をめぐって——

第一章 斎藤茂吉の鴨山考

第二章 鴨山考批判

第三章 柿本人麿の死の真相

第二部 柿本人麿の生——賀茂真淵説をめぐって——

第一章 賀茂真淵の人麿考

第二章 年齢考

第二章 年齢考（承前）

第三章 官位考・正史考

第四章 『古今集』序文考

〈下巻〉

装
幀
·
山
内
璋

水底の歌（下巻）

—— 柿本人麿論 ——

第二部 柿本人麿の生（承前）

——賀茂真淵説をめぐって——

第二章 年齢考（承前）

三つの問題点と宣長の聞いた運命の皮肉

私は前々から真淵のもっている合理精神に着目してきた。真淵は事実上の近代国学の創造者にふさわしい見事な思弁力をもっている。そして彼の思弁力の最大の特徴は、論理的整合性である。真淵の人磨考は、その数々の疑問点にもかかわらず見事に論理整合的である。それは、その一つを認めれば、他も認めざるをえない整合性をもっている。その整合性ゆえに、真淵説は容易に破ることができず、今まで長い間、絶対の權威の地位にあったのである。この論理整合なる真淵説を破るには、真淵説以上の論理整合的な理論が必要であるが、その苦心が、私のこの論文をいよいよ複雑に、いよいよ膨大にしていくのである。

この歌の解釈においても、真淵の思弁の特徴がよく發揮されている。この歌は、真淵によって、見事に論理的に解釈されている。つまり、真淵の解釈に従えば、前半は、神代から天武帝の死までのこと、後半は、天武帝の死から草壁皇子の死までを歌ったものであり、歌は歴史的時間に従って歌われていることとなる。

特に天照日女之命をアマテラスヒルメノミコトと読み、『古事記』神話との類似性を語ったとする指摘は、文献学者であると共に、古代神道の復興者である真淵の面目躍如たるところである。真

淵は『古事記』、『日本書紀』ばかりか、『万葉集』にまで歌われている神の道に、古い古い日本の神の道の伝承を見たのである。ここに万世一系の天皇が、永遠に豊葦原瑞穗國を統治し給う日本の道があると、真淵は、感激をもってこの歌を読んだにちがいない。

そしてこの感激はどこかで、『古事記』神話を、特に天孫降臨の話を耳にタコができるほど聞いた明治以後の、万葉解釈者の感激に通じるのである。真淵以後、多くの真淵の弟子、宣長（のりなが）（一七三〇—一八〇二）、千蔭などは、真淵説とちがった見解をとるが、明治以後の学者は、この点においても真淵説に従っている。

真淵説はたしかに論理整合的であるが、文字の解釈において問題がなくはない。そして論理整合性を重んじる余り、ややもすれば文字の解釈において慎重な配慮を欠き、強引なる誤読をあえてするのが真淵文献学の特徴であることは、私の前にも見たところである。

この歌の真淵の解釈に、私は三点において疑問を感じる。

第一の問題点は、「高照日之皇子」を天武帝ととるとき、この続き具合が悪くなることである。つまり「天雲の 八重かき別きて 神下し 座せまつ」るのは、天孫ニギノミコトのはずである。とすれば、当然高照らす日の皇子は、ニギノミコトとなるはずである。しかるに、どうしてここで突然、天武帝が出てくるのか。真淵が「天孫の日嗣の御孫の命、今の天皇」といっているところを見ると、おそらくニギノミコトの子孫である今の天皇という意味にとったのであろうが、それにしても、無理だと思われる。真淵はこの歌に歴史的時間の整合性を与えるために、かえって意味の飛躍をまねいたわけであるが、私が日の皇子を天武帝ととることに同意しがたいのは、皇子という言葉がこの歌では三か所に使われていて、「高照らす 日の皇子は……」「わご王 皇子の命の 天の下 知らしめしせば……」「そこゆゑに 皇子の宮人 行方知らずも」となっているが、このう